

# 未来のつばさ新聞

## 復興に立ち向かう

### いわき青年会議所奮闘

#### 一日でおにぎり4万個配布



いわきの復興に取り組む (左から) 蛭田さん、渡邊さん、星さん

7月23日にいわき青年会議所を訪ねた。同青年会議所は、20〜40歳のいわき市民が、町をよりよくしようと活動している団体だ。会員はみんな昼間仕事をしており、夜にボランティアで活動している。

同青年会議所では、復興に向けてさまざまな取り組みが行われている。その一つが、フラガールズ甲子園だ。高校生がフラダンスの美しさを競い合う。2011年のフラガールズ甲子園は、東日本大震災の影響を受け、中止。だが、「踊りたい」「踊らせてほしい」という声があがり、甲子園が復活。年々出場校も増え、今年も8月24日に開催する予定だ。

同青年会議所はイベントで子供の健康面に気を配る。例えば、いわき駅前で行われた雪を使ったイベント。子供がケガをしないように見守っていた。その姿はまるで街の警官のようだ。「いわきには、まだ風

評被害が残っていると思う」と渡邊さん。全国の青年会議所の会員が、いわきに集まった時に「どこに避難しているのですか」と聞かれた事があった。避難してない人も多く、渡邊さんは、「西日本に住んでいる人は、震災を昔のことだと思っっているようだ」と話した。

渡邊さんは「子どもたちの笑顔のために活動していることがうれしい」とやりがいを語った。フラガールズ甲子園を担当している星正和さんは「フラダンスをしている人の笑顔を見るときは、さくらまつりを担当している蛭田光一さんは「みんなが喜んでる時」と語っていた。

## 復活！あかもの屋

### 津波の試練乗り越える 浜風商店街の駄菓子屋



笑顔を見せる根本さん

7月23日、いわき市の浜風商店街にある「あかもの屋」を訪ねた。創業50年以上の駄菓子屋。海の近くに店を設けていたが、津波で壊れてしまったという。「もう店をやめようと思った」と店員の根本勇さん。そんな時、子どもから「駄菓子を食べたいからまたやって」と言われた。根本さんは、その言葉に心を打たれ復活することを決めた。

あかもの屋の名前の由来は、昔、銅(あか)を売っていたという説と、赤ちゃん用品を売っていたという説がある。根本さんは、「悪いことをした人が素直にあやまりに来てくれることがうれしい」とやりがいを語る。「子供たちが、帰りに『あかもの屋のおにぎり』と気軽に声をかけてくれる」と笑顔を見せた。

根本さんは、「子供を守るの大人の使命」と語る。子供が一人で、沼や川に行ってしまった時に、根本さんは、店を閉めてさがしに行ったという。「第2の保護者のような存在で、見守らなくてはならない」と、真剣に話していた。根本さんは「自分の体調は、自分で必ず管理する」と語った。あかもの屋では、駄菓子約100個、多い時には、150〜160個販売している。「100個以上の駄菓子を配置するうえで、気を付けているのは、売れ筋」と根本さん。人気なのは、蒲焼きさんやこんにやくゼリ



「ヤッターメン」などだ。根本さんが、食べ物の大切さを語った。根本さんは「駄菓子を落とす捨てるのはしょうがない。でも、他の国でも食べられない人が大勢いるということも考えてほしい」と話していた。今後の目標について根本さんは「前のお店のようになら、駄菓子屋で遊べるようにしたい。もっとたくさんの子供に来てほしい」と話す。例えば、お好み焼きの機械を使ってお好み焼きを作ったり、つりに子供たちと一緒に作ったりすることだ。「駄菓子屋は、子供にとって、気軽に入れる場所」。根本さんは、子供たちが良いことをしても、悪いことをしても、来てもらいたいようだ。